



文苑

幼き人

池田みきは

友のもとに返しかゝむとて、机にむかふをりから足音たかく、走りきしは、ことし三ツになり給へる、幼きとなり、君なり母君の淺草に、まうで給ひしつとにて、二ツの人形を賜へる、今こなたの祖母君の、われに似かよひて、愛らしど、のたまひつるよと、嬉しけにうち笑ふ、かほのうつくしさ、おやすけ給へは、行きかふ人の、おもはずかへり見すらんと、われもほゑまれぬ。いたさませる人形は、いたさませる君と、同じか

みのさまにて、口もとにはゑみたゝへて、何をか問は、答へなんかと、あやしまるゝはかり、ろうたし、この衣はわれのなから、母君の着せましゝまゝに、あたへつ、また人形の名は、花子の君と呼ふなり、などまはり得ぬ舌に、かづかずかたります、菓子まゐらすれば、まづかのものいはいつもうちゑめる、花子の君の、結ひし唇に、菓子子の半をわけて、あてかひ、やがてまた、己か口にいれ、うましうましと、花子の君もたふへたまひぬと、いひてまた人形の口のあたりに、己か耳をあてかひ、二ツ三ツうなづきつゝ、姉君よ花子の君の、さゆほしどのたもふよと、ほゑみたまふ、一日のうちに、幾度となく、とひきまして、同じ事を繰返しゝものかたり給ふが、私の文かけるをりなどは、何をかたりますと知りつゝ、筆

に心どられて、こたへのしぶれる事もあり、さる
 をりは、つと立ちて、祖母君のかたに走りゆき、
 わがさまをまねひつゝ、告しらするとか、暑き日
 に、幼き君のまつはり給ふは、うるさしなど、な
 れたるまゝに、こらすをりも、あなれど、又二日
 三日とひきまされは、何となう、こゝろが、りで
 ものたらぬやう、おほゆるも、深きまにしにやあ
 らむ、

蘆湖紀行 (承前)

和歌子

かくて底倉をいで、より二時間ばかりにして、蘆
 湖の東岸元箱根に達す。かゝる山中にも町はあり
 と平地に住み慣れたる身はあやしとまで見る。む
 さしやといふに入る。此家は湖にのぞみて建てら

れたり。雨はまだやまず。

五十

此湖は太古の噴火口なるべしといふ。東北二十
 丁、南北一里十三丁、周回四里、深四十六仞、形
 瓢のごとく底は南に薄は北に向ふ。四面悉く山に
 包まる。湖中に一の半島あり。塔ヶ島といふ。今
 箱根離宮のあるところなり。と駕の中にて見たる
 箱根案内といふふみにあり。

わ、蘆湖、巳の年來望めりし蘆湖は今我前にあり
 身は今や蘆の湖にのぞみて立てり。しかも深き雲
 霧は平湖を掩ひて岸より一間ばかりの水面を見す
 るのみ。向の岸はいふもさらなり。まぢかき塔ヶ
 島のかげだに見へず。

なかくにゆかしくぞあるあしのうみ霧のあ
 なたはいかにあるらん

とまけをしみをいふ人あれど、此人とても湖のけ